
Pandora Hearts ~**傍観者来る!!**~

亞瑠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P a n d o r a H e a r t s ｝ 傍観者来る！！｝

【Nコード】

N 2 3 8 3 U

【作者名】

亞瑠

【あらすじ】

オリキャラ 霧春零が Pandora Hearts の世界に行って出来事を傍観？する話です。あと、たまに番外編やるかもです。

プロローグ(前書き)

会話文多いです！

プロローグ

「遅刻なんてしたくないっ！！（泣）」

それが人生最後の言葉だった。

あまりにも馬鹿な1言だけど・・・

その言葉を発した瞬間僕の短い人生は幕を閉じた。

～～～回想～～～

僕の名前は 霧春きじはる 零れい 女だ。

人生最後の日、僕はめずらしく早起したんだ。

それで調子に乗ったのがいけなかった・・・

あの時2度寝さえしていなければ・・・

僕は2度寝して8時に起きた。

それで学校に遅れそうになっていつもは通らない道を通った。

「遅刻なんてしたくないっ！！（泣）」

その時、無人の大型トラックにはねられたんだ・・・

～～～回想終わり～～～

そして今、目の前は真っ白だwwまぢ理解できなあいww

「ほんとうに申し訳ない!!!!!!」

「ハア??」

急に見知らぬ誰かに謝られた・・・

てか何?この状況・・・

とにかく何の事を聞いてみる・・・

「なにがですかー?」(棒読み)

「俺のせいで・・・その・・・お前を殺してしまい・・・ましたあ

ああ!!」

なんかめっちゃ恐がられてるww僕そんな恐い顔してる?

してます

「・・・えつと・・・説明してもらえる?」

「えと・・・その お前さ どんな死にかたしたか覚えてる?」

「トラックに轢かれました」

「誰か乗ってた?」

「うつす！」

「んで？それを信じると？うん分かったしんじよう」

「かるっ???!」

「んで僕に何のよう?」

「うん。実はな俺のせいでお前は死んだわけ。だからおれがなんもしなかったら

お前は死んでないわけ。だからその責任とってお前を生き返らせようと思ったんだ。

で、お前には「Pandora Hearts」の世界に行ってもらいたい。まあ平行世界だ。OK?」

「うんいいよー しかもその漫画知ってるー」

「だから軽っ?!?!」

そんなん理解したもん勝ちだ！

「まあまあ」

「・・・でおまえに力を授けようと思う。原作を忘れない力・アヴイスの意思と繋がる力

かなり大きい戦闘力・未来予知の力だ。」

「あざーす」

「俺と話したいとき・用があるときは心で俺の名を呼べばいい」

「はい」

てかこいつ名前なんだっけ？wあれ？さっき聞いたのになあw

「ちなみに空だからな！！（泣）」

「はいはい」

「じゃあ、行ってこい」

「ういっす」

「あ、ちなみ空？からに落ちるから。あと落ちるとこアヴィスね」

「ハッ・・・？あー！おわったかもw」

傍観1回目 アヴィスの意思

アヴィスが見えるわー・・・下に・・・

絶賛落下中でーす

「ぎゃあああああああああああああああ

めっちゃ落ちてるよお

あ、あと0.7秒で地面につく~~~~

スタツ

「お?」

何か着地できたしww

.....

あーなんか目の前に扉的なのあるんですけどー

入っていいのかな??入っちゃうよ?

キィィ

はい開けたー開けましたー

「おお???」

はい いましたー アヴィスの意思さんいたー

「誰？あなた・・・」

「え・・・と、霧春零でーす」

「零・・・？、なんか・・・不思議な感じがする・・・
どこから来たの？」

えーー どこつてあれか？日本でーすとか答えればいいのか？

「えと・・・日本でーす」

「日本？」

「うん。知らない？」

「知らないわ」

あー あたりまえだわー

「まあいいわ！一緒にお茶しましょう！あなたとは何か、つながる
ものを感じるわ！」

「うん！僕もそんな気がする！」

いやー ほんとだよ？ なんか結構親しみやすいつてか・・・

もとから知ってる感じ？がするんだもーん

「てか、あんたのは誰なの？」

「わたし……？はアヴィスの……意志よ！」

3時間後……

はい 絶賛アヴィスの意思さんと仲良くなりましたー

そろそろかえりまーす

扉に手をかけたとき、名前を呼ばれた。

「零！」

「うん？」

「わたし、アヴィスの意志じゃない、名前はね、『アリス』っていうの！」

「え？……アリス、いい名前！」

そして僕は部屋？を出た。

さあ、次は何があるのかな？

傍観1回目 アヴィスの意思（後書き）

アヴィスの意思・・・かくのすごく難しくかった！

傍観2回目 アリスって2人いるの？

僕は一応武器を持っている。

まあワイヤーみたいなのと日本刀・銃なんだけど・・・

結構使いやすいです^^

いや、何でこんな話をするのかということさあ

アリスと会った後に散歩したら

なんだっけ？チェーン？に襲われてさあ

一か八か持ってたワイヤーで倒そうと思ったら

結構使えたんだよねえ

「おい、貴様」

「へ？」

何か話しかけられたよー

「なに？」

「貴様、私と契約しろ」

「……なに言い出してんの？この子もおおお？！」

「え……と、ゴメン無理w」

「だろうな、冗談だ。」

「……えー」

「なにこの人ー てかこの子見たことが……」

「あの、どちら様で？」

「わたしは……アリスだ」

「え……？アリスって……2人いるの？」

「本来はこの名を名乗らんだがな。貴様は特別にこの名を呼ぶ事を許してやるっ」

「あざー……すす？」

「貴様の名は？」

「霧春・・・零です」

「ほう。では零」

「うん？」

「私の話し相手になれ」

「ええ」

「零はココを出たいとは思っていないだろうか？」

「そうですねー」

「まあいいよ」

「なんかさ」

「話の流れで」

「ぼくはアリスの相棒的なになりましたー」。

あれ？作文？w

そろそろ原作開始なきがするー！。

傍観2回目 アリスって2人いるの？（後書き）

ほんとに駄文ですみません

傍観3回目 罪なき平穩って・・・

「音がするな」

「へ？」

ありすちゃんがーなんかいいだしましたー。

「うんと・・・気になるなら見てくれば？」

「零も一緒に行くか？」

「遠慮しときまゝす！」

「ふん。まあいい。いつてくる」

「いつてらっしやあゝい」

アリスちゃんは原作の元へといったのであった（笑）

さてと、暇になるなあ・・・

そーだ！白いアリスんどこにいこーっと・・・

ギイイ

「こんちわー。零ですけどもー。アリスちゃんはいますかー。」

「零っ！？久しぶり？ね！」

「うん。久しぶり」

「あのね！聞いて聞いて！？さっきね

私の愛しい人がココに来てくれたのよ！」

「へえ よかったじゃん！」

愛しい人？・・・オズのこと？

一方アリス（ビーラビット）の方は・・・

「音に誘われてやって来てみれば」

「……………赤き死神たちの臭いがするな」

「おまえは

あの時の

」!

「来るぞ」

ドンッ

「え……?」

省略させていただきます

すみません……

「おまえの罪 それは

おまえの存在そのものだ

」

そのころ零は

「そろそろ帰るわ！バイバイ！アリス」

「ええ。また会いましょ！」

そういって零は部屋を出た。

そして・・・走り出す。

はやくアメリカのユリイチ行っちゃ・・・

傍観3回目 罪なき平穩って・・・(後書き)

すみません 長くなりそうだったんで省略させていただきました

・・・駄文で申し訳ございません

傍観4回目・・・え？

「鳥の囀り

差し込む陽光

いやあくお茶を飲むには最高のシチュエーションですネ？」

1人の男が言う。

ぼろぼろになつた屋敷の中で・・・。

「いい加減ティータイムは終わりにしてください

ブレイク

不謹慎ですよ」

「いやじゃないですか

シャロンお嬢様

道が繋がるにはまだ時間があるでしょう？

君もこっちでアメでも食べないかい？

『若様』？」

「結構だ」

そこでは2人の男と1人の女が話していた。

「…そんなに緊張してるとオ

できることも失敗しちゃいますヨオ？」

プペッ

男：ブレイクがアメの棒をはき捨てる。

ブレイクは言葉を続ける。

「ただでさえ今回の任務はレインズワース家の独断デス
組織に対しても内密の事なんですからしっかりやってくださいネ
」

「…大丈夫

失敗などしません！

さあ

そろそろ準備を始めましょうか

わたくしたち
私達の手でオズ＝ベザリウス様を

お救いするために

」！

くそ・・・

どうなってるんだよこじは……！

1人の少年

オズ＝ベザリウスはアヴィスの中を走る。

しかし傷痛んだ様子だ。

やはり走るのをやめてしまう。

「ヤット…見ツケタア…」

バツ

オズにチェインが襲い掛かる。

「オイシソウナ…コドモダア…」

ドッ

「お…おお…おのれ…」

黒ウサギ 「！」

チェインは1人の少女…否、チェインにやられた。

「くくく…」トランプ「じときがでしゃばるなよ
それはわたしの獲物だ！」

「お

おまえはあの時の…

セクハラ女！！！」

そうだった瞬間・・・

オズは少女の姿をしたチエイン
アリスに蹴られる。

傍観4回目・・・え？（後書き）

すみません

変なところできつちやって・・・

&

駄文ですみません

傍観5回目 食べ物への恨みはなんとやら・・・

前回のあらすじです

オズ「セクハラ女！！！」

~~~~~終了~~~~~

「アリスってセクハラ女なのっ?！」

急に話にはまってきた零・・・

「なんだとっ?！」

アリスは反対の異議を唱えたいようだった

「え」

そしてオズは急に出てきた零に驚いたようだとぼけた声を出す

「ってか・・・アリスがそんな風に・・・」



最も低能な奴らなのですっ！」

零がそう答えた

そしてオズが引き出しの後ろに隠れて言う

「……おまえ達もそのチェインってやつなのか？」

黒<sup>アキラ</sup>つなぎと……もう1人」

「そうだ」

「ボクは違うよ

あと僕の名前は霧春 零だよ」

零は何気に自己紹介をした

「あ……スイマセン

俺はオズ＝ベザリウスです……」

オズも零をもう1人などといってまったためか

あやまった

「チェインって人を襲う習性があるの？」

おまえも初めて会ったとき俺を殺そうとしてただろ

あれってなんでさ

めっちゃこわかったんですケド」

「それはなんの話だ」

アリスは即答した

それにオズは・・・

「・・・え??」

アリスは続けた

「初めてあつたとき私はおまえを死神どもから助けてやっただろっ」

(あれ・・・???)

「誰と間違えてるかは知らんが失礼なやつだな」

(やっぱあれは・・・)

夢だったのか・・・?)

「それに私をトランプなどと

一緒にするのも許せんことだ

なにしろ私は 「

「うわー!?!」

アリスの言葉が終る前に声を上げたのはオズだった

「やったよクッキー発見

もうおなかペコペコだったんだよねー

助かったあ？」

「あっ!?!?」

零がとつさに叫んでしまった・・・が

周りには聞こえてないようだった

「それ・・・私が隠してたクッキー・・・」

その声はスルーされる

「・・・変わったやつだな おまえは

さつきはあれだけ取り乱していたクセに

もう私を恐れないし この空間にも馴染んでしまっているのだろ  
う」

ガリガリガリガリガリガリガリガリ

オズはクッキーを食べる

それにはリスが重なって見えるような食べ方だった

そしてその時・・・

ガンッ！！！！！！！！！！

オズの頭に何か・・・いやそこらへんに落ちていた本が

当たっていた

「あのさあ・・・それ私のクッキーなんだよねえ

勝手に食べていいと思ってんの？」

零の目はとても冷たかった

オズは頭にたんこぶができ、零におびえていた

そしてアリスは始めて見たというような顔で零を見ている

「食べ物の恨みは恐ろしいんだよ・・・

例えクッキー1個でも・・・ね？」

「す・・・すみ・・・ません・・・でし・・・た」

「じゃあ返してくれるかな？」

ニコッ

零は笑ったがそれは悪魔の笑みにしか見えなかっただろう

オズがクツキーを渡すと零は満足したように言った

「うん、ありがとう

あ、話し続けてていいよ」

「はい……」

……

沈黙を最初に破ったのはアリスだった

「で、おまえはなぜこの空間に馴染んでいるんだ？」

「んー……もう十分くらいありえないものを見せられたから

なれたってゆーか

そういうもんなんだって受け入れた方が現状把握が楽だって」

「叔父さんも前俺が誘拐されかけた時に言ってたよ

『ごういうときに大事なのはまず冷静になる事だ！』って」

(誘拐……?)

「それに

おまえも俺の敵ってわけじゃないんだろ？

さっきも俺のことを助けてくれた

ありがとな」

「……………神経が凶太いのか…

いや、ただのバカか。」

「アリス……それはひどいよww」

零は笑いながら突っ込む

そして

「『アリス』それが私の本当の名だ」

アリスはオズにそう名乗った・・・

傍観5回目 食べ物への恨みはなんとやら・・・(後書き)

ほんとに・・・

駄文&変なところできて

ごめんなさい・・・

傍観6回目 まぢかよお・・・

前回のあらすじ！（適当）

オズ「零さんがブチ切れっ！

恐かった・・・」

~~~~~終了~~~~~

「アリス・・・？」

「黒^{アキラ}つ^{アキ}さ^{アキ}ぎは周りが勝手につけたものだ

おまえ・・・と零には特別にその名で呼ぶ事を許可してやるっ」

「ありがとうっございま〜す！」

零はそう答えた・・・そしてオズは

（「アリス」

なんだかとても懐かしく感じる・・・）

考え事をしていたオズはアリスの話など

上の空だった

「せっかく死神たちがおまえをここへ墮^おとしてくれたというのに
勝手にしなれたら困るんだよ」

ひよい

アリスは花瓶にはいつている花を持った

「おまえはオレをどうするつもりなんだ？

おまえの目的ってなんなんだ？」

「あ 僕も聞きたい！！！！！！！！！！」

オズの質問に零が賛成する

「零は違うが・・・おまえと同じさ

私もアヴィスから抜け出したいんだ」

「！！」

トン

アリスはオズの目の前・・・テーブルの上に飛び乗った

持っていた花を捨てて・・・

「だからそのために待っていた

私の契約者となりうる存在をな　！」

（契約者・・・？）

「ああ　それで僕にも声掛けてきたのか」

零はそう聞いた

最初からそう予想を立てていた零は真相を聞き出そうとした

「ああ、まあそうなるな」

「へえ」

零はその事を聞き、興味が失せたようだった

そしてその瞬間何かいやな予感がしたのだ

「アリス、僕ちよつと用事思い出したわ

「じゃあね」

零はそこを立ち去った

零は心の中で『空』と呼ぶ

「なんでしょ〜かあ？」

「・・・しゃべりかたきもいんですけど」

「ひどっ?！」

「あのお・・・」

僕未来予知能力?もらったじゃん」

「ああそうだあつたな」

「んでさ何かいやな予感すんだけど」

「ギクッ」

「はなしてごらん?怒らないからあ」

「あ……の……その……実は

この世界にもう1人転生してくるやつがいます……」

「はああああ??？」

「いや……そのね?なんていうかさ

おまえの大親友のやつ居ただろ?

そいつがおまえを追って自殺しちゃってさ」

「え……まぢかよ……」

「でそいつの強い願いでここに……」

零は今まで出ないほど後悔した

自分の親友が自分を追って死ぬなど思っても見なかったのだ

「いいよわかった！まあちょっとショックだけど

いいよ。許すよ」

「あぢー—————す！」

「その代わりあいつにも僕と同じ能力つけてよね……？」

「……………アイアイサー」

傍観6回目 まぢかよお・・・(後書き)

誤字・脱字あつたら教えてください!

お願いします・・・

いつものことですが駄文ですみません・・・

傍観7回目 会いたい

前回のあらすじ（適当）

空「零にも大親友がいたww」

~~~~~終了~~~~~

零が死んだ？どうしてなの？

誰のせい？そんなことはどうでもいい

ただ・・・私は零あなたに会いたい・・・

零が死んで3日目

私は・・・自殺した

自殺した後は良く覚えてない

ただ、はっきりと覚えてるのは1つだけ

神様の「零のところへ連れてってやる」という言葉だけ

その言葉を聞いた瞬間

私は言葉では表せない感情で心が満たされた

多分それは

嬉しさと、感動と、

悲しさだっ  
たんだ

「あああああああ

もう・・・嫌だな」

零はつぶやいた

何に対してかは自分でも良く分からないように

酷く混乱しているようだった

(何であいつが？自殺？なんでなの？僕のせい？)

零はこんなんじゃないやダメだなと思いつつ

考える事をやめられなかった

「会いたいな・・・乙姫いっき」

零は眩く

言葉に思いを乗せて

「会いたいよ・・・零」

零の親友乙姫も眩く

ほんの少しの希望おぼせを持って

傍観7回目 会いたい(後書き)

今回も駄文ですね・・・  
すみません

次は多分零と乙姫が会うと思います  
こんな駄文でよければぜひ見てください・・・

## 傍観8回目 再開

前回のあらすじ(適当)

零「乙姫いじぎいいいいいいいい!!!!!!!!」

~~~~~終了~~~~~

〜乙姫視点〜

えと・・・迷いました、はい。

どうしよお・・・

あっちもこっちも同じ風景に見える・・・

なんでこんなことになっ?

・・・ああ、あの神様のせいか・・・

たしかアヴィスに落ちるからって言われたんだ・・・

じゃあここはアヴィスなのかな

とにかく零に会いたいしなあ・・・

まあそこからへん歩いてよつと

（零視点）

・・・

困った

乙姫をどうやって探せばいいんだろ？

あいつ方向音痴だからな・・・

迷ってなきゃ良いけどさ

一応僕と同じ能力せんじつりきがあるし

チエインに出くわしても大丈夫だと思っけど・・・

まあそこからへん歩いてよつかな・・・

そのころオズは

シャロン・・・もといマッドベイビー（チェイン）に

襲われたところをアリスに助けられていた。

アリス「根拠などないぞ

私はただ自分の中で生まれた核心に従ったままで！」

長いので省略させていただきますorz

省略した所でおきた事はオズがアリスと契約し、
アリスとオズが一体になりました。・・・カナ？

「やっと手に入れたぞ！！！」

私の軀からだだ！！！！

これで力を解放できる

アビス（ここ）から

出ることが出来る!?!」

ドッ

アリス（オズ）は鎌でアヴィス切りつけた

ピシ

そして・・・

ブレイクたちがいた世界へ戻っていった

そこで零・乙姫は・・・

零は空を呼び出した

空「なんだ？零」

零「あのさ僕と乙姫に携帯を与えてくだサイ？」

空「（最後のサイにめっちゃ殺気がっ!?!?)」

「配線とかはっ!？」

零「おまえ何とかしろ 神だろ」

.....

空「分かりました・・・」

次の瞬間 零の目の前には青の携帯が現れた

零「おおサンキュ」

その携帯には乙姫のメアドが登録されていた

そして乙姫の目の前にも可愛い水色の携帯が現れた

その携帯には1着のメールが届いていた

その内容は

ども〜オレだよオレ

神様です！w

零の要望によりお前に携帯を渡す

一応零のメアドとか登録してあるから

あとオレのも

じゃな

乙姫がそのメールを読み終わると同時に

携帯に1通メールが届いた

乙姫「ん？」

零からだった

よ！零だよ

久しぶりだな！

携帯に察知機能がついてて

乙姫が携帯を持つてる限り乙姫の居場所は分かる

今から乙姫の所に行くから待ってるよ！

携帯ちゃんと持ってるよ！

乙姫「零に・・・会えるんだ・・・！」

零「うん・・・」

乙姫「・・・ちょっと遠いなあ・・・」

零は携帯を見つめながら走っていた

乙姫と零の距離は約3Kmだ

零「ハアハアハア・・・」

零はやっと乙姫との距離を100mに縮めた

そして1人の人影が見えた

乙姫「・・・！！零ーーーー！！！！」

乙姫は零を見つけ名前を呼んだ

零「乙姫！」

乙姫は零の元に駆け寄った

その目からは大粒の涙が溢れていた

傍観8回目 再開（後書き）

更新遅くなってすみませんでした

こんな駄文ですがよろしくお願いします

傍観9回目 チェインの大切さ

前回のあらすじ（適当）

零「やっぱり携帯はいいわあ」

~~~~~終了~~~~~

オズたちはすでにアヴィスから出て

シャロンたちに保護されていた

そして

零たちもまた神に保護されていた

零「おい〜 なんですかねえ コレは？」

ニコツ そんな音が聞こえそうなほど

完璧な笑みだったが ある人かみによれば

この世の終わりに直面した感じがしたそうだ

空「いやぁ・・・なんかちょっとね？」

乙姫「うわぁ〜〜 周り全部真っ白だぁ〜〜」

零「乙姫、喜ぶな・・・」

そう、零・乙姫は今まさに真っ白な空間にいたのだ

零「それで？」「コトはどこのなの？」

空「神空間ですっ！！！」

乙姫「へえ・・・でもなんでこんなところにつれてこられたの？」

零「そうだよ。なんでいんのさ？」

空「ちよっと思っただけがありましたね・・・聞くけどさ

お前らどうやってアヴィスから出るつもりだったの？」

零・乙姫「・・・さあ？」

空「ほらね！ やっぱりノープランー！！！」

零「（ムカツ！）・・・だからなんだよ」

零は空の挑発するような言い方に多少のイラつきを感じたが

無視することにした

空「お前ら専用のチェイン作って契約させて アヴィスからだそう  
かと思ひまして」

零・乙姫「・・・おおおおー！！！」

空「OKですか・・・？」

零「もち！」

乙姫「OK！OK！」

こうして零・乙姫の2人はオリジナルでチェインを作ることになった

乙姫「わたしのチェインは零のチェインをサポートできるのがいい  
な？」

零「僕のはやっぱり戦闘力最高で」

乙姫「出来れば小型がいいかな・・・」

零「僕のは・・・そうだな 大きさはどうでもいいや」

乙姫「零はやっぱり戦闘出来るやつ?」

零「うん その方がいいかなとおもって

乙姫はやっぱりサポート系かあ」

乙姫「うん! 零のサポートなれてるし!」

空「要望は以上ですか?」

零・乙姫「以上で!」

空「んじゃ作つときます!」

そんじゃま、アヴィスに返すわ」

零「おう!」

乙姫「はい!」

空「チェインはできたらお前らのところに贈るから

契約してちゃんと出るんだぞ!」

零「わかってるって」

乙姫「アイアイサー」

零と乙姫が

空に親心出てきた気がしたと思ったのは

いうまでもない

傍観9回目 チェインの大切さ（後書き）

駄文ですがこれからもよろしく願います

**番外編を傍観！ 1回目（前書き）**

番外編なので読み飛ばしてくださっても結構です

## 番外編を傍観！ 1回目

番外編第1回目です！！！！

〈目次〉

キャラ紹介

番外編ストーリー

キャラ紹介

名前

霧春きりはる  
零れい

年齢

14歳

誕生日

8月17日

外見

髪型はショートカット青紫色  
クール系美少女(?)

好きな物

食べ物ならお菓子

小物なら青・水色・白・黒系

人なら賢く物事の見極めが出来る人(自分の限界が分か

る人)

嫌いな物 食べ物ならあまりなし

小物ならピンク系

人ならうざいやつ・馬鹿なやつ・うるさいやつ

追記

神によって殺された人間

見た目とちがってとても腹黒い

名前

空くう

年齢

見た目は17〜18歳

実年齢は500近いらしい

誕生日

不明

外見

黒髪で零より少し短いくらい

そこそこの顔は整ってる

好きな物

特にないが尽くす事はキライではないらしい

嫌いな物 特にない

追記 意外とヘタレ

名前 近衛<sup>このえ</sup> 乙姫<sup>いつき</sup>

年齢 14歳

誕生日 6月4日

外見 ロングストレートで黒髪  
かわいい系の顔だが髪型と色で大人っぽく見える

好きな物 食べ物・小物はなんでも好き！  
人なら話してみても物事を包み隠さずにいうと思った人

嫌いな物 食べ物・小物は嫌いなものはない！  
人なら話してみても物事を包み隠して言うと思った人

追記

近衛財閥とかつていえるくらいのお金持ち

そのため周りからきつい事をいわれたことがなかったが  
零に初めてきつい事を言われてから零と仲良くするよう  
になった

番外編ストーリー 零と乙姫の出会い

零が小学校5年生の時の出来事だ

乙姫「近衛乙姫です！ よろしくお願ひします！！」

零が通う小学校に乙姫が転校してきた

近衛といえは有名な金持ちだった

先日 先生から転校生の事からきかされていたクラスの子供たちは

どんな子かとわくわくしていたが零だけはちがった

先生「じゃあ 近衛さんは霧春さんの隣の席ね」

乙姫「はい！」

乙姫は先生に案内され零の隣の席に座った

乙姫「霧春さん、よろしくね！」

乙姫は隣の零に声を掛けた

しかし零は

零「・・・悪いけどあんたが愛想笑いやめるまでヨロシクしたくないな」

そう言い放った

一瞬でクラスの空気が凍った気がした

零「・・・いや なんでもないや よろしく」

零は空気を読んで差し伸べられていた乙姫の手をとった

放課後、乙姫は零に声を掛けた

乙姫「ねえ 一緒に帰らない？」

零「いいけど」

帰り道、先に口を開いたのは零だった

零「ねえ・・・あんたさなんで僕をさそったの？」

乙姫「霧春さんと話がしたくて」

零「ふーん」

乙姫「ねえ・・・霧春さん」

何で私が愛想笑いしてるってわかったの?!

乙姫はあんな事をいわれたにもかかわらず嬉しそうに聞いてきた

零「いや・・・なんとなく・・・」

乙姫に圧倒されて零は力なさ気にこたえた

乙姫「私にあんなはつきり言ってくる人とか初めて見たよ!!!」

零「ああ・・・いや・・・」

乙姫「でき、やっぱり私とはよろしくしてくれないのかな？」

零「・・・いや 今のあんたいいと思うよ それがホントのあんた  
だろ？」

近衛さん 改めてヨロシク！

乙姫「乙姫でいいよ！ こちらこそよろしく！ 零でいいかな？」

零「いいよ！」

これが零と乙姫の出会いだった

~~~~~end~~~~~

傍観10回目 チェインが出来るまでの苦勞？

空「・・・うーん」

空は零と乙姫のチェインを作っている真っ最中だった

空「零のは・・・コレで決まりだろ？ 乙姫のは・・・」

？「空さん、そろそろ休憩にしたらどうですか？」

空は声のしたほうに振り返る

？「緑茶と紅茶、どちらにしますか？」

空「ああ 陸か・・・緑茶にするわ」

陸「はい、どうぞ しかし、神様とあるうものが

人間のためにそんなに必死になるなんてね」

空「まー いいだろ？ そういうのも」

陸「ダメとはいいませんよ ただ管理を怠らないで下さいね！」

空「わかってるって」

陸「そうですか？ ならいいんですけど」

少し、陸の事について語ってみよう

陸は空の弟で死んだ人間を管理している

空は神の中でも最上位に位置する 総管理 を勤めている

陸の地位は2番目であるが最上位との差は大きかった

陸は全然気にしていないようだが・・・

そのころ零たちは・・・

零「チェイン・・・どんなんかなあ」

乙姫「楽しみだね！ 零！」

零「そうだな きつとすごい物が出てくるぞ！ 期待しとけ乙姫！」

乙姫「うん！」

空はほんとに嬉しそうに出来たチエインを零たちに贈る準備をした

そして数分後

零と乙姫のもとにチエイン贈られてきた

零・乙姫「これが・・・僕の（私の）チエイン!？」

チエイン「きゅい!」

チエイン2「きゅう?」

傍観10回目 チェインが出来るまでの苦勞？（後書き）

ついに出せました、オリジナルチェイン！

名前がまだ決まってません・・・

決まり次第更新します！

大変おこがましいですがチェインの名前の候補があれば
ぜひ教えていただきたいと思います！

傍観11回目 「い」 「い」を吐き出すところ

前回のあらすじ(適当)

チエイン1「きゅいきゅいきゅいー!」

零「いや、伝わらないって」

~~~~~終了~~~~~

零「これが・・・僕の?」

チエイン1「きゅいー!」

零は思った

これがほんとに強いのか・・・と

乙姫「わあ~~~~ かつわいい?」

チエイン2「きゅう?」

乙姫「零！ここに空サンの手紙がはいつてるよ！」

乙姫は考え事をしている零にはなしかけた

零「ほんとに強いのかよ（ボソッ

手紙？ みせてみー」

その手紙の内容とは・・・

どもどもオレですオレ！

空デース！

はいはい！

お前らに送ったチェインの説明しちゃうぜコラ

ここまで読んだところで零がキレた

零「ハアアアアアアアアアアアアアアア？！？！？！？！？！？！

何だよこいつ！？ 前よりすんげえうざくなってんすけどお？  
「！」

乙姫「……まあ おちっこ？ ね？」

零「……まあ……」

零たちは続きを読んだ

えつとねえ？

きゅー！ って言うのは零のチェインで

きゅい？ って言うのは乙姫のチェイーン！

名前ね？ 名前知りたいよね？

えつとねえー

零のほうのチェインの名前はねえ

デストラクション・ザ・オール  
全ての破壊者

かっこいいだろ？

んで

乙姫の方は

プロテクション・オフ・ザ・シー  
全ての守護者

すんごいだろ？

んじゃー 以上でっす

零「うん 名前は いいけどさ

書き方まちムカツク！ 何回使ってたんだ！」

乙姫「まあまあ 名前だけでもマシなんだから！」

おちつこつ？ ほら！」

零「まあ・・・」

乙姫「あ！ そうだ！ せっかくなかったいい名前なんだし

特別な時にこの名前でよぼっと」

零「え？ もつたいくない？」

乙姫「だって・・・」

かっこいいからこそ もつたいぶるんだよ！！」

零「・・・ああ ソウダネ」

零は棒読みで乙姫の意見に同意した

乙姫「普段は きゅいちゃん ってよぼっと！」

零「んじゃ 僕は きゅう かな？」

きゅう」「きゅう」

カヅ「カヅ……」

零・乙姫「そんじや、井、井」口を開くとしますか……」

カヅ「カヅ……カヅ……」

傍観11回目 ついに「ココを出るとしよう」(後書き)

今回も駄文でしたね・・・  
すみません

オリジナルのチェインの名前ですが  
両方とも

骸っち さんが考えてくださいました！  
ありがとうございます！

## 傍観12回目 ローア

前回のあらすじ(適当)

プロテクション・オブ・ザ・シー  
全ての守護者「きゅいきゅいきゅい」

乙姫「……ごめんね 伝わらなくて……」

~~~~~終了~~~~~

零「さあ〜〜 できるよ〜」

乙姫「でもさ どの時代に?」

零「……」

乙姫「考えてなかったんだね」

零「うわああああああ orz」

乙姫「でも大丈夫そうだよ」

零「??.?」

乙姫「きゅいちゃん的能力で好きな時代に飛べるってさ!」

零「マジでえ?!?!」

乙姫「うん! きゅいちゃんはすごいんだもん!」

零「じゃあ 出発！……！！！」

乙姫「おおー……！！！」

こうしていく時代もきまり（零の中で）

零・乙姫はチェインとの契約にうつった

零「んじゃ契約しまーす」

きゆう「きゆうー！」

乙姫「わたしもー」

きゆう「きゆうー！」

こうして零たちは無事アヴィスから出たのだった

そうして出た時代はオズと黒ウサギビュビュットが出た時代だった

零「っん？ 出たのか？」

乙姫「アヴィスのとこと景色違うよ！ 出たんじゃない？」

零・乙姫『ありっ？！ きゅう)きゅいちゃん(はっ？！？！？！』

きゅう(きゅう！)

きゅい(きゅい！)

きゅうときゅいの声は零と乙姫の頭の上から聞こえてきた

というか

零と乙姫の服装が変わっていたのだ

零の服装はドレスでシャツの襟のような襟でリボンがついている)
ゆるゆる)

くびれの部分には太いベルトがついていて

ドレスの下部は広がっていてボタンがついている

頭にはミニハット・・・そこに逆十字を模したストラップのような物がついている

乙姫の服装もドレスで襟は首まであり零と同じくりボンがついている
くびれの部分にもリボンがついており

後ろ（背中）で大きなリボン結びになっている

頭にはハートの髪飾り　そして十字を模したストラップのような物
がついている

そしてきゆうときゅいの声はストラップのような物から聞こえてい
るのだった

零「何？　この格好・・・」

乙姫「かわいい〜」

零「たしかに・・・　乙姫は似合ってるけど」

乙姫「零も似合ってるよ〜」

その時　零の携帯がなった

零「お　神からメールだわ」

乙姫「おお！読んで読んで！」

やっほー

無事にアヴィスから出られたんだなー

今お前らはドレスを着てると思う

その理由はな

お前たちの格好は目立ちすぎるからな

そんでもってお前ら名前も変えろ！

今いるところはオリ設定でつくった

屋敷だからー

あ 当主は零なー

なんか

ローア家って言うところだから

決まったらメールくれ！

よろーーーー

零「……うぜー」

乙姫「名前どうする？」

零「スルー?!」

乙姫「名前……!」

零「僕の名前はそのままで大丈夫じゃね？」

乙姫「レイ＝ローア? いいんじゃない?」

零「乙姫はどうする?」

乙姫「うーん…… 近衛 乙姫でしょ?

このえいつき! このえ! のえ!

ノエがいい!!--!」

傍観12回目 ローア(後書き)

駄文ですみません・・・

終り方変ですみません・・・

o r z

傍観13回目 気づいたんだけど

前回のあらすじ(適当)

乙姫「零と姉妹になりました！」

~~~~~終了~~~~~

なぜこんなことに・・・？

そうだ思い出せ

何でこんなことになったのかを

~~~~~

僕は

このローアの屋敷に住んで気づいた事がある

それは

屋敷が広すぎて不便だという事だ

なので僕、霧春零こと、レイ＝ローアは

当主自ら使用人を探しているのだ

そして街を歩いていると

?「あいつを捕まえるー!!!」

零「は？」

そしてその瞬間

僕の財布がとられた

だれに?そんなのきまつてる

捕まえると叫んでいた奴が追っている相手だよ

そしてぼくはそいつを追った

理由は・・・僕の財布には日本円で

1000万が入っているからだ!!!!!!

そんで

追っていったら

いつの間にか犯人が諦めたのか

こっちに向かってきて・・・

てい！

犯人「グハアツ！」

零「あのさ、僕 お嬢様 しゃなくて

当主だから、とう しゅ ！」

犯人「・・・え、ちょ、なにそれ、

・・・ほんとに?!」

零「ああ レイ＝ローア、ローア家の当主」

犯人「・・・あのローア家の!？」

なぜか犯人はこの世の終わりのような顔をしている

零「別に雇ってあげても良いけど」

犯人「本当ですか!？」

零「ああ いいよ まず お前の名前は？」

犯人「ウインです！ ウイン！ 男！ 多分16歳！」

零「じゃあ ウイン、特技は？」

ウィン「おれ、結構強いよ？」

そういったウインの顔つきは

今までのおびえたような、絶望したような顔とは違い

怪しげな笑みを浮かべていた

零「どのくらい？」

ウィン「1人で大男10人は倒せるよ」

零「じゃあ・・・採用で！」

ウィン「よっしゃあ！」

零「ウインは他に4人、使用人を見つけてきて！

できれば

・掃除など家事が出来る人×2

・庭師

・コック

よろしくね 期限は今日の夜まで！」

ウィン「はい！」

そうしてウインは

風のような速さで探しにいった

零「（家に帰えろつと）」

ローア家屋敷にて

乙姫「空さん これもっと出してよー！」

空「あいあいさー」

屋敷では乙姫と空がお茶をしていた

空がケーキと紅茶を出し

乙姫がたべる

こんなかんじだ

零「乙姫」

乙姫「零！ おかえりー」

使用人見つかった？」

零「ああ 1人はな 他はその1人に

探すように任せてきた」

空「あ 零これ食べる？」

零「いらない 紅茶出して」

空「・・・はい」

そんなことをしているうちに

日が暮れてきた

その時

乙姫「お客さんだー」

そういつて乙姫が玄関へ出ると

そこにはワインと4人の男女が立っていた

乙姫「……ちょっとお待ちを」

ウィン「……はい」

少しぎこちない受け答えをして

乙姫は零を呼びに言った

零「その4人がお前の連れてきた使用人候補か」

ウィン「はい！

えっと右から

ローザ、家事が出来ます

デイズ、家事が出来ますしローザと連携も取れます

グレイ、コックです

ドロイ、庭師です」

零「ローザさん、デイズさん、あなたたちがやるのは

メイドと呼ばれる仕事です 出来ますか？」

ローザ「出来ます」

デイズ「任せてください」

零「 그레이さん、あなたは料理を作って運ぶ事が仕事です

男のあなたに出来ますか？」

デイズ「こなせる」

零「ドロイさん、庭師はセンスも重要です

出来ますか？」

ドロイ「やっとなんかあります」

零「最後にウイン、あなたには執事をしてもらいます

出来ますか？」

ウイン「任してください！」

零「じゃあ採用でー！」

使用人の紹介

ローザ

女 17、8歳

メイド

デイズ

女 16、7歳

メイド

グレイ

男 15、6歳

コック

ドロイ

男 18、9歳

庭師

ウィン

男 16歳

執事

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2383u/>

Pandora Hearts ~傍観者来る!!~

2011年10月21日09時59分発行